

社会的比較によって生じる感情や行動の発達的变化¹⁾

——パーソナリティ特性との関連性に焦点を当てて

外 山 美 樹

東京成徳大学・日本学術振興会

本研究の目的は、小学4年生、6年生ならびに中学2年生を対象とし、社会的比較を行った後、その個人に生じる感情や行動について発達的に検討すること、ならびにそれが個人のパーソナリティ特性とどう関連しているのかを検討することであった。領域別コンピテンス、競争心、情緒性のどのパーソナリティ特性が社会的比較によって生じる感情や行動に強く影響を及ぼすのかを検討するために、3つのパーソナリティ特性を説明変数に、社会的比較の結果下位尺度を各々基準変数とする重回帰分析を学年別に行った。本研究の結果より、社会的比較を行った後に、その個人に生じる感情や行動は、パーソナリティ特性や発達段階に応じて異なることがわかった。小学生（4年生ならびに6年生）においては、領域別コンピテンスが特に、社会的比較によって生じる感情や行動と強く関連していた。一方、中学2年生においては、競争心が社会的比較によって生じる感情や行動に影響を及ぼしていた。

キーワード：社会的比較、発達的变化、パーソナリティ特性

問題と目的

Festinger (1954) が提唱した社会的比較 (social comparison) は「自分と他者とを比較することの総称」と定義される。Festinger (1954) が社会的比較過程理論を提唱してから、半世紀が過ぎようとしているが、その間に社会的比較に関する研究は精力的に行われ、その理論の妥当性を裏づける研究が蓄積されている一方、近年では、社会的比較が自己査定や自己高揚など、様々な機能に役立つことも指摘されている (e.g., Butler, 1992; Taylor & Lobel, 1989)。

このように Festinger (1954) の理論は、多くの実証的研究を生み出しているが、Festinger の社会的比較過程理論をめぐる諸知見の大部分は、青年のしかも大学生という非常に限られたサンプルを対象としたものであり、大学生以外の発達段階において妥当性を有するかについてや社会的比較の発達過程については、ほとんど検討されないままに経過してきた (高田, 1990)。

子どもを対象とした社会的比較に関する研究の多くは、もっぱら、様々な機能をもつ社会的比較がいつ頃から生起するのかといった、社会的比較が開始される発達上の時期を検討したもの (e.g., Butler & Ruzany, 1993) であり (レビューとして、高田, 1987, 2004)、社会的比較が行われた後の影響についてはこれまで焦点が当てられてこなかった (Blanton, Buunk, Gibbons, & Kuyper, 1999)。これは日常場面における社会的比較について特にそ

1) 本研究にご協力いただきました小・中学校の諸先生ならびに児童・生徒の皆様にご心より御礼申し上げます。また、本論文の作成におきましてご助言、ご示唆をいただきました査読者の方々に深く感謝申し上げます。

うである。社会的比較は、学校のクラス環境において頻繁に観察される行動である(Frey & Ruble, 1985)にもかかわらず、児童・生徒における社会的比較の影響については、これまで研究がされてこなかった(Huguet, Dumas, Monteil, & Genestoux, 2001)。

しかし近年、こういった現状を踏まえて、子どもを対象にした社会的比較の影響に関する実証的研究が増えている。例えば、Blanton et al. (1999)やHuguet et al. (2001)は、中学1年生が自分よりも幾分学業成績の良いクラスメイトと自分の学業成績を比較する傾向があること、こうした成績の高いクラスメイトと社会的比較をする傾向が、個人の学業成績の向上を予測することを見いだしている。さらに、外山(2006)は、中学1年生の学業成績の向上には、比較をしている友人の学業成績と本人の学業コンピテンスの相互作用的な影響が見られ、日頃学業成績が高い友人と比較をしている人のうち、学業コンピテンスが高い人に限って学業成績が向上することを見いだしている。

また、外山(1999)は、小学校高学年児に対して、仮想上の友達の遂行(学業成績、運動能力など)が自分のそれよりも高い状態(上方比較)の物語を読ませ、その時の感情や行動を自由記述させた。その結果、子どもの中には、“自己向上の努力”というポジティブな行動につながるものもいれば、“友達への嫉妬”や“劣等感”というネガティブな感情を抱くものや“努力の放棄”や“友達への攻撃”といったネガティブな行動につながるものもいた。このように、社会的比較とりわけ上方比較の影響は必ずしも一方向によるものばかりではなく、そこにはパーソナリティ特性や比較の対象など様々な要因が関わってくるものと考えられる(Buunk, Collins, Taylor, Van Yperen, & Dakof, 1990; Hemphill & Lehman, 1991; 高田, 1981)。

本研究では、小学4年生、6年生ならびに中学2年生を対象にして、社会的比較の発達的变化に

ついて検討することを目的にした。より具体的には、社会的比較を行った後に、その個人に生じる感情や行動(以後“社会的比較の結果”と記す)が発達的にどのように変化するかを検討すること、および社会的比較の結果に影響を及ぼす要因としてパーソナリティ特性に焦点を当て、どのようなパーソナリティ特性が社会的比較の結果にどのように影響を及ぼすのかについて発達的に検討することにした。社会的比較の発達過程に関する研究の多くは、幼児・児童(特に低学年)や大学生以降(e.g., 高田, 1990)を対象にしたものである。これはひとえに、既述したように子どもの社会的比較の生起の時期を探ることや、青年期(主に大学生)における自己概念の形成のメカニズムとしての社会的比較の役割を探ることに焦点が当てられてきたことに帰するものと考えられる。一方、児童期の高学年から大学生に上がるまでの社会的比較の発達的变化についての実証的研究はほとんどみられない。しかし、この時期は自己意識の形成や社会的認知の発達が著しい時期でもあり(Rholes, Newman, & Ruble, 1990)、自己評価における社会的比較が可能になる(Ruble, 1983)と考えられている小学4年生以降を対象にして、社会的比較の発達的变化を検討することは、非常に意義深いと考えられる。

社会的比較の結果に影響を及ぼすであろうパーソナリティ特性としては、“情緒性(神経症傾向)”, “競争心”ならびに“コンピテンス”を取りあげることにした。情緒性は、大学生を対象とした研究において、社会的比較志向性(social comparison orientation: 社会的比較に従事する傾向)との間に強い関連性が見いだされており(Gibbons & Buunk, 1999)、社会的比較の結果に影響を及ぼすパーソナリティ特性であると考えられる。

また、外山・伊藤(2001)は、小学生においては周りの友達に負けたくないという競争意識から社会的比較を行う児童が多いことを報告しており、

人と競い合うことや勝ち負けへの感受性が高い競争心というパーソナリティ特性が社会的比較の結果に影響を及ぼすことが考えられる。

コンピテンスとは、“認知された有能さ(Harter, 1985)”のことであるが、コンピテンスと類似した概念である自尊感情²⁾と社会的比較の関連性については、主に大学生を対象とした実証的研究が行われており、一般的に自尊感情が低い人ほど、社会的比較行動に従事しやすいという結果が得られている(e.g., Gibbons & Buunk, 1999; Wayment & Taylor, 1995)。また、外山・伊藤(2001)の結果では、児童においては、自尊感情の高低で社会的比較を行う頻度に差は認められなかったが、社会的比較を行う機能が異なることがわかった。すなわち、自尊感情の高い人が自己向上のために社会的比較を行う傾向があるのに対して、自尊感情の低い人は、自分の劣等さを再確認するために他者と比較を行い、その結果、さらに自己に対してネガティブな感情を抱くという悪循環に陥っていた。このような知見から、コンピテンスというパーソナリティ特性が社会的比較の結果に影響を及ぼすと考えられる。

方 法

被調査児

小学4年生110名(男子57名, 女子53名), 6年生108名(男子66名, 女子42名), ならびに中学2年生144名(男子78名, 女子66名)の計362名(男子201名, 女子161名)。このうち、いずれの尺度にも欠損値のなかった小学4年生103名(男子53名, 女子50名), 6年生102名(男子63名, 女子39名), ならびに中学2年生141名(男子76名, 女子65名)の計346名(男子192名, 女子154名)が分析の対象とされた。

2) コンピテンスは自尊感情の概念に似ているが、有能さを漠然と測定するのではなく、いくつかの領域に分けて測定しようとしている点、動機づけ面を強調している点で自尊感情とは異なる(桜井, 1999)。

質問紙

以下の尺度から構成された。

(1) 社会的比較の対象/相手に関する質問紙ならびに社会的比較の結果に関する質問紙

まず、小学4, 6年生においては、日頃よく比較する友達の名前を1人書かせ³⁾, 中学2年生においては、日頃よく比較する友達を1人思い浮かべるように教示した。

(a) 社会的比較の対象/相手に関する質問紙

どのような対象をその友達と比較するのかについて、予備調査の結果に基づいて設定した5領域(勉強, スポーツ, 性格, 外見[ルックス], 友人関係)の中から1つ選んでもらった。比較する対象が選択肢の中になく場合には、自由記述してもらった。そして、選択してもらった領域において、比較する友達がどのような相手であるのかを“自分より優れている(上である)”“自分と同じくらいである”“自分より劣っている(下である)”の3つの中から1つ選んでもらった。

(b) 社会的比較の結果に関する質問紙(Table 1参照)

その友達と比較した後どのような気持ちになったり、どういうことをしたりするのかを、予備調査の結果に基づいて作成された27項目に対して5段階評定(1. いいえ, 2. どちらかといえばいいえ, 3. どちらともいえない, 4. どちらかといえばはい, 5. はい)で回答を求めた。

(2) 領域別コンピテンス尺度

上記の社会的比較の対象の領域である勉強領域(項目例“勉強ができると思いますか”), スポーツ領域(項目例“運動神経がいいと思いますか”), 友人関係領域(項目例“友達がたくさんいると思いますか”)におけるコンピテンスは、桜井(1992)の児童用コンピテンス尺度項目を用いた。また、性格領域(項目例“優しいと思いますか”),

3) 質問紙終了後に、書いてもらった友達の名前を消しゴムで削除するように教示した。

外見領域（項目例“自分の顔がかっこいい〔かわいい〕と思いますか”）におけるコンピテンスは、独自に作成した。各領域4項目ずつの計20項目で構成されており、5段階評定（1～5点）で回答を求めた。

(3) 情緒性尺度

曾我(1999)による5因子性格検査(FFPC)の情緒性因子を用いた。情緒性とは“ストレスや脅威、あるいは他人の思惑に対して敏感で、緊張や不安が強い。何事にも自信がなく落ち込みやすい傾向”であり、項目例としては、“人から見られていると落ち着かない”“何をしても、うまくいかないような気がする”が挙げられる。8項目で構成されている。3段階評定（1～3点）で回答を求めた。

(4) 競争心尺度

Matthews(1980)の競争心尺度の翻訳版(大淵・佐藤, 1991)を子ども用に修正して用いた。8項目で構成されており、5段階評定（1～5点）で回答を求めた。項目例としては、“負けず嫌いである”“何でも、楽しむことよりも勝つことの方が大切である”が挙げられる。

手続き

上記の質問紙が2学期(10月)に実施された。調査はクラス単位で行われ、担任教師が質問項目を読みあげて被調査児に回答させる強制速度法を採用した。

倫理的配慮

調査に先立ち、教頭、学年主任および担任教師から、調査内容についてのインフォームド・コンセントを得た。調査は無記名方式で、学校の成績とは関係がないこと、答えた内容が先生や友達あるいは家族に洩れることは絶対にないことをフェースシートに明記するとともに、担任教師より教示してもらった。

結果と考察⁴⁾

(1) 社会的比較の相手

社会的比較の相手においては、“自分より優れ

ている(上である)”が67名(19.4%)、“自分と同じくらい”が270名(78.0%)、そして“自分より劣っている(下である)”が9名(2.6%)であった。Festinger(1954)は、比較する相手としては、自分と類似した他者が一般的に好まれることを命題としているが、本研究の被調査者においても自分と同じくらいの相手と比較する傾向が見られた。また、児童・生徒においては自分より劣っている人との比較である下方比較はほとんど見られないことがわかった。同様の結果は、外山・伊藤(2001)においても見られている。なお、社会的比較の結果は、社会的比較の方向性(上方比較なのか下方比較なのか)によって異なってくるのが考えられるため(e.g., Buunk, Van Yperen, Taylor, & Collins, 1991; Lockwood & Kunda, 1997; Taylor, Wayment, & Carillo, 1996)、以降の分析においては、比較する相手として“自分よりも劣っている(下である)”を選んだ9名は分析から除外した。よって、有効回答数は337名となり、今後の分析における社会的比較の相手は、自分と同じくらいかそれ以上ということになった。

(2) 社会的比較の対象と領域別コンピテンスの関係

社会的比較の対象(勉強、スポーツ、性格、外見〔ルックス〕、友人関係)の内訳を見ると、勉強が98名(29.1%)、スポーツが98名(29.1%)、性格が93名(27.6%)、外見が31名(9.2%)、そして友人関係が15名(4.5%)であった。先行研究(外山, 1999)と一致して、児童・生徒においては、勉強、スポーツ、性格が比較対象となることが多いことがわかった。なお、比較対象として自由記述をした2名においては、分析から除外した。よって、有効回答数は335名となった。

次に、比較対象として勉強を挙げた“勉強群($n=98$)”と勉強以外を比較対象に挙げた“勉強以外群($n=237$)”において、勉強領域におけるコン

4) 本研究の分析には、SPSS(ver. 11.0)を使用した。

ピテンス得点に差が見られるのかどうかを t 検定で検討したところ、“勉強群” ($M=11.74, SD=4.13$) のほうが“勉強以外群” ($M=10.89, SD=3.12$) よりも有意に得点が高かった ($t=2.01, p<.05$)。同様の手続きを用いて検討したところ、“スポーツ群 ($n=98$)” ($M=13.29, SD=4.71$) のほうが“スポーツ以外群 ($n=237$)” ($M=10.48, SD=4.81$) よりもスポーツ領域におけるコンピテンス得点が高く ($t=4.78, p<.01$)、“外見群 ($n=31$)” ($M=10.87, SD=3.99$) が“外見以外群 ($n=304$)” ($M=9.39, SD=3.89$) よりも外見領域におけるコンピテンス得点が高かった ($t=1.98, p<.05$)。また、有意水準ではあったが、性格領域におけるコンピテンス得点は、“性格群 ($n=93$)” ($M=12.80, SD=2.63$) のほうが“性格以外群 ($n=242$)” ($M=12.11, SD=3.08$) よりも高かった ($t=1.89, p<.10$)。一方、友人関係領域におけるコンピテンス得点においては、“友人関係以外群 ($n=320$)” ($M=12.79, SD=3.29$) のほうが、“友人関係群 ($n=15$)” ($M=9.57, SD=5.17$) よりも有意に高かった ($t=3.48, p<.01$)。

以上の結果より、勉強、スポーツ、性格、そして外見においては、その領域に自信があってコンピテンスの高い子どもがそれらの領域を比較対象としていることがわかった。このことより、児童・生徒における比較行動の背景には、自己向上動機が作用しているものと示唆される。つまり、その領域に自信があってコンピテンスが高い者が、自分と同じくらいの友人あるいは自分よりも優れた友人と比較することで、友人をしのごうとする向上性の圧力 (Festinger, 1954) が作用するものと考えられる。友人関係においては、その領域におけるコンピテンスが低い人が比較することがわかった。友人関係においては、それを比較対象としている人数自体が少ないため (全体の 4.5%)、ここでの解釈は控える。

(3) 社会的比較の結果についての因子分析

社会的比較の結果の 27 項目において、学年別による因子分析 (最尤法→プロマックス回転) を

行った。固有値の減衰率および因子の解釈可能性を考慮した結果、いずれも 6 因子解が妥当との結論を得た。また、いずれの学年においてもほぼ同一の因子構造が得られた⁵⁾。Table 1 には、全学年を対象に同様の因子分析を行った結果が示されている。

第 1 因子には、落ち込んだ、泣きたくなった、などの項目が高い負荷量を示していることから“自己卑下”と命名した。第 2 因子には、その人と話さなくなった、その人のことを無視した、などの項目が高い負荷量を示していることから“回避的行動”と命名した。第 3 因子には、その人とよく話すようになった、その人のことをほめた、などの項目が高い負荷量を示していることから“接近的行動”と命名した。そして、第 4 因子には、もっと頑張ろうと思った、やる気がでた、などの項目が高い負荷量を示していることより“自己向上”と命名した。第 5 因子には、何もなかった、なんとも思わなかった、などの項目が高い負荷量を示していることより“無力的行動”と命名した。最後に、第 6 因子には、自分の方が勝ったと思った、うれしくなった、などの項目が高い負荷量を示していることから“自己高揚”と命名した。“自己卑下”、“自己向上”、“自己高揚”は社会的比較を行った後に、その個人に生じる感情で、“回避的行動”、“無力的行動”、“接近的行動”は社会的比較を行った後に、その個人に生じる行動とおおまかに分類できる。

因子分析の結果に基づき、各因子に高い負荷量を示す項目 (Table 1 の枠で囲まれた項目) で下位尺度を構成した。次に、尺度の内的一貫性を検討するため、Cronbach の α 係数を算出した結果、自己卑下で .83、回避的行動で .89、接近的行動で .77、自己向上で .87、無力的行動で .69、そして

5) ただし、小学校 4 年生はやや不安定な因子構造で、2 つの因子に高い負荷量を示す項目が 2 項目ほどあった。因子構造は小学校 6 年生ならびに中学校 2 年生と同様であった。

Table 1 社会的比較の結果の因子分析の結果(全体)

	M	SD	抽出因子					
			I	II	III	IV	V	VI
自己卑下 ($\alpha=.83$)								
落ち込んだ	1.82	1.34	.78	-.03	-.17	.28	-.02	-.06
泣きたくなった	1.71	1.17	.77	-.03	-.12	-.02	-.20	.18
ムシャクシャした	1.91	1.20	.71	.01	-.08	.04	.05	-.08
むなしくなった	1.77	1.30	.67	.03	.10	-.07	.06	-.07
みじめになった	2.02	1.34	.66	.00	.00	.02	.06	-.07
比べたことを後悔した	1.81	1.20	.62	-.10	.06	-.11	.18	.03
その人をうらやましく思った	2.65	1.62	.44	.01	.20	-.12	-.08	-.11
回避的行動 ($\alpha=.89$)								
その人と話さなくなった	1.49	.97	.03	.92	-.01	.00	.01	.04
その人のことを無視した	1.43	.91	.01	.91	-.01	.05	.04	-.03
その人のことをバカにした	1.46	.89	-.11	.87	.05	-.02	.03	-.05
接近的行動 ($\alpha=.77$)								
その人とよく話すようになった	3.30	1.23	-.09	-.04	.68	-.07	-.03	.12
その人ともっと仲良くなった	3.82	1.67	-.09	-.06	.58	.09	-.12	-.02
その人のことを目標にした	3.33	1.59	.09	.03	.58	.17	.13	-.06
その人のことをほめた	2.72	1.34	.10	-.04	.57	-.13	-.12	-.05
前よりもその人と比べた	2.58	1.37	.02	.30	.40	.07	-.18	-.01
自己向上 ($\alpha=.87$)								
もっと頑張ろうと思った	3.94	1.38	.01	.00	-.03	.74	.11	-.12
やる気がでた	4.21	1.10	-.03	.03	.12	.58	.06	.11
負けたくないと思った	3.81	1.32	.10	.07	-.10	.48	-.04	.19
あきらめようと思った	1.94	1.30	.21	.06	.12	-.43	.23	.09
その人を見習いたいと思った	3.35	1.40	.10	-.12	.30	.40	-.04	-.19
無力的行動 ($\alpha=.69$)								
何もしなかった	2.40	1.55	.02	.07	-.14	.11	.76	-.04
なんとも思わなかった	2.87	1.67	-.17	-.03	-.11	.00	.53	.02
考えないようにした	2.10	1.31	.15	.28	-.02	.03	.44	.04
仕方がないと思った	2.72	1.52	.27	-.10	.25	-.05	.38	-.07
自己高揚 ($\alpha=.71$)								
自分の方が勝ったと思った	2.70	1.18	.08	.00	-.03	-.02	-.08	.79
うれしくなった	3.00	1.10	-.08	.00	.29	.05	.11	.59
自分に自信がついた	3.52	1.33	-.11	-.13	.11	.40	.09	.45

注. $n=335$.

自己高揚で.71であった。一応満足し得る内的一貫性が見られたが、 α 係数が低い下位尺度に対しては、項目数を増やすなどの処置を行い、今後はより内的一貫性の高い尺度への改善が望まれる。

(4) 社会的比較の結果の発達の变化

学年別、性別による「社会的比較の結果」6つの下位尺度の平均値と標準偏差をTable 2に示した。次に、「社会的比較の結果」の6つの下位尺度と性別、学年との関係を見るために、各下位尺

度について、性別(2)×学年(3)の二要因分散分析を行った。なお、本研究の多重比較には、すべてLSD法(有意水準5%)を用いた。

まず、「接近的行動」および「回避的行動」においては、いずれの主効果、交互作用も有意ではなかった。「自己高揚」および「自己向上」においては、学年においてのみ主効果が有意(順に、 $F(2,334)=6.22, p<.01$; $F(2,334)=5.44, p<.01$)で、自己高揚においては小学6年生が中学2年生より

Table 2 学年別、性別による「社会的比較の結果」下位尺度の平均値 (*M*) と標準偏差 (*SD*)

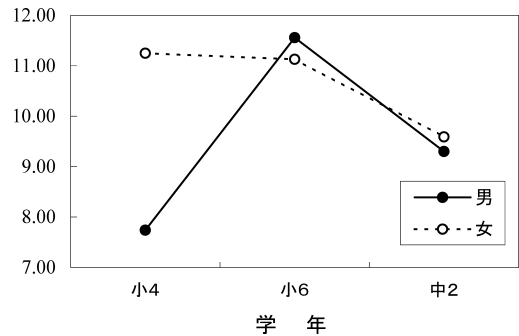
	小学4年生 (<i>n</i> =95)				小学6年生 (<i>n</i> =101)				中学2年生 (<i>n</i> =139)			
	男子 (<i>n</i> =53)		女子 (<i>n</i> =42)		男子 (<i>n</i> =62)		女子 (<i>n</i> =39)		男子 (<i>n</i> =76)		女子 (<i>n</i> =63)	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
自己卑下	9.62	2.49	12.47	4.29	14.23	5.76	14.59	6.94	13.35	6.61	16.05	8.00
自己高揚	8.45	3.49	9.09	2.00	10.00	2.74	10.11	2.70	9.33	3.02	8.50	2.84
自己向上	18.12	4.21	18.45	3.87	20.51	4.19	19.89	4.18	18.94	4.47	20.34	3.91
接近の行動	14.67	5.41	16.06	4.24	16.64	3.81	16.05	5.00	15.48	4.83	15.63	5.29
回避の行動	4.29	3.02	4.25	2.59	4.69	2.49	4.08	2.34	4.76	2.66	4.26	2.43
無力的行動	7.74	3.04	11.25	3.68	11.56	4.20	11.13	4.51	9.30	3.65	9.59	3.95

も得点が有意に高く、自己向上においては、小学6年生が小学4年生ならびに中学2年生よりも得点が有意に高かった。

そして、「自己卑下」においては、性別 ($F(1,334)=7.86, p<.01$)、学年 ($F(2,334)=10.71, p<.01$) いずれの主効果も有意であった。性別では女子の方が男子よりも有意に高い得点を示した。学年の主効果について多重比較を行った結果、小学4年生が小学6年生ならびに中学2年生よりも得点が有意に低かった。交互作用は有意でなかった。

最後に、「無力的行動」においては、性別 ($F(1,334)=6.68, p<.05$)、学年 ($F(2,334)=8.31, p<.01$) いずれの主効果も有意で、交互作用も有意であった ($F(2,334)=7.56, p<.01$)。そこで、性別、学年別のそれぞれで単純主効果の検定を行った。性別の単純主効果の検定では、小学4年生 ($F(1,334)=21.37, p<.01$) においてのみ女子が有意に高い得点を示した。学年の単純主効果検定では、男子においてのみ有意で ($F(2,334)=12.86, p<.01$)、小学6年生>中学2年生>小学4年生の順に得点が有意に高かった。Figure 1に「無力的行動」における性別、学年別の得点を示した。

以上の結果より、社会的比較の結果、女子は男子よりも自己卑下的な感情を抱くことがわかった。他者（親や先生）から比較される時にも、女子は男子よりも自己卑下的な感情を抱きやすいことが報告されている（外山・伊藤, 2001）が、社会的

**Figure 1** 「無力的行動」における性別・学年別の平均得点

比較をする、される両者において、女子は男子よりもネガティブな感情を抱きやすいことが示された。

発達のみにみると、社会的比較の結果は、小学6年生を境目に変化が見られることが多いようである。自己高揚的な感情は小学6年生を境目に減少していた。自己卑下的な感情は、小学6年生になると急に高くなっていた。また、自己向上は小学6年生がどの学年よりも高かった。さらに、無力的行動においても、男子においてのみであるが、小学6年生がどの学年よりも高かった。堂野・田頭・土江 (1990) は児童期から青年期にかけての劣等感の発達の变化を検討し、小学5年生の時期が大きな変動期・転換期であり、心身ともに動揺しやすく不安定になりやすい発達段階であることを指摘している。さらにこの時期は、自己意識の高

まり（桜井，1992）や，社会的認知の著しい発達が見られる時期でもあり（Rholes et al., 1990），社会的比較の影響を被りやすい発達段階であると言えるのかもしれない。

(5) 社会的比較の結果に及ぼすパーソナリティ特性（領域別コンピテンス，競争心，情緒性）の影響

領域別コンピテンス，競争心ならびに情緒性の記述統計量を Table 3 に示した。次に，領域別コンピテンス，競争心，情緒性のどのパーソナリティ特性が社会的比較の結果に強く影響を及ぼすのかを検討するために，3つのパーソナリティ特性を説明変数に，「社会的比較の結果」6つの下位尺度を各々基準変数とする重回帰分析を学年別に行った（Figure 2 参照）。領域別コンピテンス（以下，“コンピテンス”と略す）は，比較対象として選んだ領域におけるコンピテンス得点を用いた。

決定係数 (R^2) について検討すると，小学6年生ならびに中学2年生において回避的行動を基準変数とした場合と中学2年生において無力的行動を基準変数とした場合を除いて有意となった ($R^2 = .08 \sim .31$)。次に，標準偏回帰係数（パス係数）について見ていく。まず小学4年生は，コンピテンスと社会的比較の結果が強く関連していることがわかった。コンピテンスの高い人は，社会的比較の結果，自己高揚的な感情を抱き ($\beta = .55$)，自己向上を目指し ($\beta = .31$)，接近的行動に従事し ($\beta =$

.36)，無力的行動に従事しない ($\beta = -.40$) ことが示された。また，情緒性といったパーソナリティ特性も社会的比較の結果に影響を及ぼしており，情緒性の高い人は，社会的比較の結果，自己卑下的な感情を抱きやすく ($\beta = .46$)，自己向上は目指さず ($\beta = -.21$)，回避的行動をとりやすい傾向が見られた ($\beta = .39$)。さらに，競争心が自己向上 ($\beta = .29$) および無力的行動 ($\beta = .32$) と関連していた。

次に小学6年生においては，小学4年生と同様に，コンピテンスが社会的比較の結果と強く関連しており，回避的行動を除くすべての社会的比較の結果と関連していた。また，情緒性が接近的行動 ($\beta = -.26$) と競争心が自己卑下 ($\beta = .22$) および自己高揚 ($\beta = .33$) と関連していた。

最後に中学2年生においては，競争心というパーソナリティ特性が社会的比較の結果に影響を及ぼすことが明らかになった。それは，競争心の高い人は，社会的比較の結果，自己卑下 ($\beta = .16$) や自己高揚 ($\beta = .18$) の感情を抱きやすく，自己向上を目指し ($\beta = .28$)，相手に接近する ($\beta = .29$) というものであった。また，コンピテンスが自己高揚 ($\beta = .29$) と，情緒性が自己卑下 ($\beta = .39$) と関連していた。

本研究の結果より，小学生（4年生ならびに6年生）においては，“コンピテンス”といったパーソナリティ特性が特に社会的比較の結果に大きく影響を与えていた。それは，コンピテンスの高い者は社会的比較を行った後で，自分に自信がいたり，比較した相手に近づきさらに努力しようと思ひ，決して無気力にはならないという結果だった。外山（2006）は，友達との学業成績における社会的比較が学業成績の向上に結びつくのに，コンピテンスが重要な要因であることを指摘している。社会的比較が行われた時にポジティブな結果が生じるためには，子どものコンピテンスを高めるような介入が重要になってくるものと考えられる。

中学2年生においては，“競争心”が社会的比

Table 3 領域別コンピテンス，競争心ならびに情緒性の記述統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数
領域別コンピテンス			
勉強	10.98	3.46	.82
スポーツ	11.27	4.90	.90
性格	12.28	2.94	.77
外見	9.55	3.86	.81
友人関係	12.76	3.27	.67
競争心	24.52	7.16	.80
情緒性	24.09	7.56	.71

注. $n = 335$.

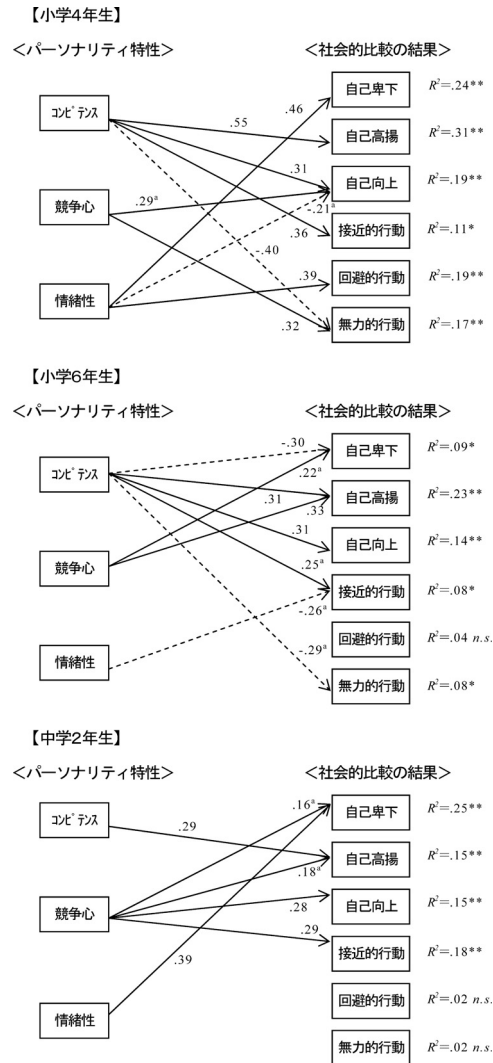


Figure 2 学年別におけるパス・ダイアグラム

- 注1. 数値は標準偏帰係数を表す。数値にaが記されているもののみ5%水準で有意で、それ以外はすべて1%水準で有意である。
- 注2. 実線は正のパス、点線は負のパスである。
- 注3. * $p < .05$, ** $p < .01$.

較の結果に対して重要な役割を果たすことがわかった。中学校は、これまでの小学校との環境とは異なり、生徒により挑戦的な環境を提供する場である。例えば学習場面においては、定期試験という形での校内一斉テストによって学習の評価が行われるし、運動場面においても、部活動といった同じ目標に取り組む仲間との競争場面に多々曝

されることになる。そうした競争的な文脈が増えてくる中学生においては、“競争心”というパーソナリティ特性が社会的比較の結果に影響を及ぼす力が大きくなっていくものと考えられる。

ところで、その競争心が社会的比較の結果に与える方向は一樣ではなく、例えば“自己高揚”といったポジティブな感情に結びつくものと“自己

卑下”といったネガティブな感情に結びつくものがあった。どちらの感情につながるのには、比較相手との遂行水準の差の大きさや別のパーソナリティ特性など様々な要因が絡んでくるものと考えられ、今後詳細な説明が望まれる。

また、中学2年生においては、社会的比較を行った後の行動（接近的行動、回避的行動、無力的行動）に影響を及ぼすパーソナリティ特性は、競争心のみであり、しかも行動の中でも接近的行動のみへの影響であった。年齢が上がるにつれて、パーソナリティ特性が直接的に社会的比較が行われた後の行動に影響を及ぼすのではなく、そこには別の要因が媒介 (mediate) あるいは調整 (moderate) している可能性が考えられる。本研究は一時点における質問紙調査であるため、社会的比較によって生じる感情と行動を並列的に扱ったが、例えば、パーソナリティ特性→感情→行動といった感情と行動に時間的因果的系列性を仮定できる可能性も考えられる。今後は、縦時的な変化を追跡する縦断的研究ならびに実験的手法を導入した研究を試みるとともに、要因間の構造をより適切にとらえたモデルを提出し、その妥当性について実証的に検討し、社会的比較の結果に及ぼす様々な要因の影響についてより明らかにしていく必要がある。

ところで、小学6年生ならびに中学2年生においては、回避的行動に影響を及ぼすパーソナリティ特性は、本研究で取りあげたコンピテンス、競争心ならびに情緒性の中においてはなかった。相手のことを無視したりバカにしたりする回避的行動は、いじめや攻撃行動に代表される子どもの様々な問題行動へ結びつく恐れのあるものであり、こうした問題行動を理解する上で社会的比較が重要な鍵となる可能性も考えられる。例えば、上方比較をする相手が自分にとって嫌いな人であったり、横柄な性格の持ち主であったりすると、その相手に対する攻撃行動が増すことが指摘されている (Smith, 2000)。今後は、社会的比較が行われた

場合に、どのような文脈でどのようなプロセスを経て回避的行動に結びつくのか詳細に検討していくことが早急に望まれる。そうすることで、比較する友人の優れた遂行によって、多少なりとも自己の相対的劣位の知覚が生じても (Tesser, Campbell, & Smith, 1984)、どうすれば建設的な行動をとることができるのかといった教育的介入を提供することができよう。

以上、本研究より、社会的比較を行った後に個人に生じる感情や行動は、パーソナリティ特性や発達段階に応じて異なることがわかった。しかし、本研究では、社会的比較の結果に影響を及ぼす要因として、年齢とコンピテンス、競争心そして情緒性のパーソナリティ特性のみしか扱っていない。また、本研究では、社会的比較の方向性として下方比較は扱っていないため、今後は、社会的比較の方向性（上方比較 VS. 下方比較）についても検討を加える必要がある。

さらに、社会的比較の結果は、学校やクラスの風土などによって異なってくる可能性が考えられる。例えば、競争や社会的比較を過度に強調する学校やクラスにおいては、社会的比較のネガティブな結果を被りやすくなるのかもしれない。本研究は、ある地域の小・中学校1校でのサンプルに基づいた調査であり、今後は、学校やクラスの環境 (e.g., 社会的比較に対する担任教師の規制) の文化的要因などについても考慮していかなければならない。また、“社会的比較の結果尺度”や“領域別コンピテンス尺度”は、本研究で独自に作成・使用したものであり、その信頼性（時間的安定性）や妥当性については検討されていない。今後は、尺度の充実化も急務であると考えられる。

冒頭のところで述べたように、日常場面における社会的比較の影響を検討した研究は数少ない。今後は上述したような課題について詳細に検討していきながら、子どもの社会的比較の影響について探っていきたい。

引用文献

- Blanton, H., Buunk, B. P., Gibbons, F. X., & Kuyper, H. (1999). When better-than-others compare upward: Choice of comparison and comparative evaluation as independent predictors of academic performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 420-430.
- Buss, A. H. (1986). *Social behavior and personality*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- (パス A. H. 大淵憲一・佐藤公文 (1991). 第4章 社会的パワーを得るために一支配 大淵憲一 (監訳), 対人行動とパーソナリティ 北大路書房 pp. 77-110.)
- Butler, R. (1992). What young people want to know when: Effects of mastery and ability goals on interest in different kinds of social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 934-943.
- Butler, R., & Ruzany, N. (1993). Age and socialization effects on the development of social comparison motives and normative ability assessment in kibbutz and urban children. *Child Development*, **64**, 532-543.
- Buunk, B. P., Collins, R., Taylor, S. E., Van Yperen, N. W., & Dakof, G. (1990). The affective consequences of social comparison: Either direction has its ups and downs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 1238-1249.
- Buunk, B. P., Van Yperen, N. W., Taylor, S. E., & Collins, R. L. (1991). Social comparison and the drive upward revisited: Affiliation as a response to marital stress. *European Journal of Social Psychology*, **21**, 529-546.
- 堂野佐俊・田頭穂積・土江禎子 (1990). 児童期の心理的ストレスに関する一研究 広島文教女子大学紀要, **25**, 165-176.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison process. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Frey, K. S., & Ruble, D. N. (1985). What children say when the teacher is not around: Conflicting goals in social comparison and performance assessment in the classroom. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 550-562.
- Gibbons, F. X., & Buunk, B. P. (1999). Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 129-142.
- Harter, S. (1985). *Manual for the self-perception profile for children*. Denver, CO: University of Denver.
- Hemphill, K. J., & Lehman, D. R. (1991). Social comparisons and their affective consequences: The importance of comparison dimension and individual difference variables. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **10**, 372-394.
- Huguet, P., Dumas, J. F., Monteil, J. M., & Genestoux, N. (2001). Social comparison choice in the classroom: Further evidence for students' upward comparison tendency and its beneficial impact on performance. *European Journal of Social Psychology*, **31**, 557-578.
- Lockwood, P., & Kunda, Z. (1997). Superstars and me: Predicting the impact of role models on the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 91-103.
- Matthews, K. A. (1980). Measurement of type A behavior in children: Assessment of children's competitiveness, impatience-anger, and aggression. *Child Development*, **51**, 466-475.
- Rholes, S., Newman, L., & Ruble, D. N. (1990). Understanding self and other: Developmental and motivational aspects of perceiving persons in terms of invariant dispositions. In E. T. Higgins, & R. M. Sorrentino (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social behavior*. Vol. 2. New York: Guilford Press. pp. 369-407.
- Ruble, D. N. (1983). The development of social comparison processes and their role in achievement-related self-socialization. In E. T. Higgins, D. N. Ruble, & W. W. Hartup (Eds.), *Social cognition and social development*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 134-157.
- 桜井茂男 (1992). 小学校高学年生における自己意識の検討 実験社会心理学研究, **32**, 85-94.
- 桜井茂男 (1999). 子どものやる気と社会性 風間書房
- Smith, R. H. (2000). Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparisons. In J. Suls, & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers. pp. 173-200.
- 曾我祥子 (1999). 小学生用5因子性格検査 (FFPC) の標準化 心理学研究, **70**, 346-351.
- 高田利武 (1981). 対人恐怖と社会的比較 年報社会心理学, **22**, 201-218.
- 高田利武 (1987). 社会的比較の発達過程に就て——文献的考察—— 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, **36**, 349-362.
- 高田利武 (1990). 社会的比較——その発達過程—— 三隅二不二・木下富雄 (編), 現代社会心理学の発展

- II ナカニシヤ出版 pp. 96-119.
- 高田利武 (2004). 「日本人らしさ」の発達社会心理学
ナカニシヤ出版
- Taylor, S. E., & Lobel, M. (1989). Social comparison activity under threat: Downward evaluation and upward contacts. *Psychological Bulletin*, **90**, 245-271.
- Taylor, S. E., Wayment, H. A., & Carillo, M. (1996). Social comparison, self-regulation, and motivation. In R. M. Sorrentino, & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition*. New York: Guilford Press. pp. 3-27.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. (1984). Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 561-574.
- 外山美樹 (1999). 児童における社会的比較の様態 筑波大学発達臨床心理学研究, **11**, 69-75.
- 外山美樹 (2006). 中学生の学業成績の向上に関する研究——比較他者の遂行と学業コンピテンスの影響——教育心理学研究, **54**, 55-62.
- 外山美樹・伊藤正哉 (2001). 児童における社会的比較の様態(2)——パーソナリティ要因の影響——筑波大学発達臨床心理学研究, **13**, 53-61.
- Wayment, H. A., & Taylor, S. E. (1995). Self-evaluation process: Motives, information use, and self-esteem. *Journal of Personality*, **63**, 729-757.
- 2005.7.22 受稿, 2006.2.8 受理—

Children's Emotion and Behavior after Social Comparison: Age and Personality Differences

Miki TOYAMA^{1,2}

¹Japan Society for the Promotion of Science

²Faculty of Humanities, Tokyo Seitoku University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2006, Vol. 15 No. 1, 1-12

The purpose of the present study was to examine children's emotion and behavior that arose after social comparison, and to find personality correlates of such emotion and behavior. Participants were elementary school children, grades 4 and 6, and junior high school students in their second year. Multiple regression analyses were conducted in order to predict children's emotion and behavior after social comparison with personality variables as predictors. The variables used for prediction were specific competence, competitiveness, and emotional instability. It was found that children's emotion and behavior after social comparison were different, depending on their developmental stage and personality. For elementary school children, social comparison-based emotion and behavior had a strong association with specific competence. In contrast, for junior high school students, it was competitiveness that was associated with the emotion and behavior.

Key words: social comparison, developmental change, personality, specific competence